魔法少女リリカルなのは～運に見放された転生者～

Vergil

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～運に見放された転生者～

【Ｎコード】
Ｎ３４８２Ｚ

【作者名】
Ｖｅｒｇｉｌ

【あらすじ】
まあ、死んで転生した。何処でもあるような話だ。
だがな、あんな死に方あるのか。神はどれだけ俺が嫌いなんだ！！
折角。折角出来たのに……色々と運に見放された不幸な転生者の物語です。

プロローグ（前書き）

コメディ、ギャグに初挑戦です。

こういう笑系統のを書いてみたくなりまして。やってしまいました。

デビルメイクライは、技などで出てきます。主に主人公の。

プロローグ

俺は棗涼介。うん問題無い。
年齢は１８歳であってる。
性別は男……うん問題なし。
此処までは良い、此処までは……
次はとても重要、俺は死んで違う世界に転生した転生者らしい（？）
しかも赤ちゃんからだ。

なんでや、なんでこんな事になったんだ。好きな女の子に告白して彼女も出来て、リア充の生活を送り始めて、なんで！　なんでや。

なんでリア充になって１５分後に死ななあかんねん俺は、世の中はそんなにリア充が嫌いなのか？　そうなんだろう。

だからリア充になって、幸せ絶頂期の俺を死に陥れたんだろう。そうなんだよな。

ならなんで俺だけを死なせた。他にもリア充の奴らは居るだろう？
　なんで俺なんだよ。

折角彼女が出来てリア充になれたのに、リア充を満喫したかったのに、なんでや。初リア充になって１５分後に死ぬって、もうギャグやん。ギャグ以外の何者でもないやん。

何で爆発して死ななあかんねん。リアル、リア充爆発じゃないか！！

転生した直後は相当荒れた記憶がある。

しかーーーーーし！！！！！　此処が魔法少女リリカルなのはの世界と知って、テンションハイ！！！！！！

なんだが、その事実を知ったのは俺が小学四年生の頃。丁度４年生の頃に海鳴市って所に引っ越してきたんだ。

その名前を聞いて此処が魔法少女リリカルなのはの世界って知ったんだ。その時クラスは違ったが、他のクラスになのは達がいるのを発見したんだが、不思議な事にアリシアだと思われる人物が居た。

更に見たことの無いツンツンヘアーの黒髪でそこそこ格好いい男の子も混ざって居た。背はなのは達より頭一つ分位高いかな、まあ俺ほどじゃないけど。

そんな事よりも俺は目が点になった。それと同時に、この時点でＰ・Ｔ事件も終わっていて、闇の書事件も終わっている事を物語っていた。しかも二つともハッピーエンドで終わった可能性がある。

あの男の子は原作には居なかった。多分俺というイレギュラーが現れたことにより起こった小さな歪みかもしれないし転生者という可能性も捨てきれないがもうどうでもよかった。

当然の事だがこの時点でやる気が失せた。人生に落胆した。

だけど、神は俺を見捨てて居なかった。

俺が小学五年生の時、デバイスを手に入れた。普通なら手に入れた瞬間テンションがｈｉｇｈになるんだが、なれなかった。

だって、山奥の洞窟だ。しかも、此処まで来るのに死ぬような思いもした。更に目の前には見たことのある女の子が俺にデバイスを手渡した。

こうしてしまった経緯が、家族でピクニックに行く。山の探検に出て。遭難。

不幸だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　と全力で叫ぼうかと思った時に、目の前から大きな毛むくじゃらの動物が現れた。

全長は３ｍ位で四足歩行で、全身が茶色の毛で覆われている。

手足には鋭い爪。あれで引っ掻かれたら即死間違いなし。

鋭い牙に強靭な顎。あの顎に噛まれたら俺の二度目の人生終了を告げましたになる。

此処まで言えばなんとなく想像は着くと思うが、クマだ。しかもクマの視線が俺を捉えて動こうとしない。とても怖い、小便漏らしそう。脱糞しそうだよぅ。

いくら精神年齢が２０を超えていても小学五年生の肉体でクマに勝てない。転生する前でも勝てる要素は……無し、一個もないよぉぉぉぉぉぉ！！

俺とクマまでの距離は大体５ｍ弱しかない。

さあどうする俺？　まさにｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ．　俺が思案している間にもクマが近づいてくる。

さあどうする俺？！　回れ右してダッシュか？　それとも死んだふりか？　どっちが良いんだ！！

選択の時だ。どっちがバッドエンドルートなんだ？　逃げるか、死んだふりか。どっちが良いんだ。

それとも戦闘……そのルート死亡フラグが半端じゃないんですけど。ダメだな。

もうヤバイ。こうなったら・・・・・

……死んだふり。君に決めた！！

俺はその場で倒れて死んだフリをした。さあ、クマよ俺をスルーしろ。

コレで万事解決だと良かったんだが、首元の襟をクマが噛んで俺を持ち上げた。その瞬間、俺は恐怖のあまり失禁して気絶した。カッ

コよく言えばブラックアウトと言える。

しかし、直ぐに意識を取り戻した。側頭部に何か固いものがぶつかった様な痛みでだ。それは運ばれている最中に俺の後頭部が木にぶつかった。その痛みで意識が覚醒した。

ああ、俺の二度目の人生にも終止符が打たれたな、せめて原作キャラとは一度で良いから話をしてみたかったな。悲哀感を全身から放出しながらクマに連れ去られていった俺。

そして、洞窟の奥深くに連れていかれたその瞬間、俺は驚愕した。

だって俺の目の前に女の子が居た。しかも見たことがある……高町なのは？　違う。目の色が違う。

するとクマがその女の子の目の前に俺を下ろすと、何処かに消えていった。

彼女はマテリアルズの一人。星光の殲滅者（シュテル・ザ・デストラクター）。ということはリインフォースが生きている可能性は高いな。

そんな事を一瞬のうちに考えていると、彼女が手を差し伸べてくる。その手には、日本刀の形を型取った白銀のネックレスがあった。

俺はそれを手を伸ばして受け取った。彼女は優しい微笑みを見せた。

心臓が高鳴る。ドクンドクンという音がハッキリ聞こえる。心拍数もハネ上がり、顔が赤くなっていっているのが手に取るように分かる。

相手にこの心臓の音が聞こえてないか凄く心配だ。聞こえてたら滅茶苦茶恥ずかしいぞ。

俺は顔をそむけて、彼女に真っ赤になった顔が見られないようにした。丁度その視線の先に彼女の足元が見えた。しかも、ふらついていた。

危ない、俺はそう叫んだ時には体が動いて彼女の体を俺の体で受け止めていた。まだ発育途中のお胸さんが俺の胸板にむにゅうってなった……ｏｈ　ｙｅｓ！！！！！！

だが直ぐ彼女の異変に気が付いた。息が荒く、呼吸が激しい。おでこに手を当ててみると熱いし、しかも頬が赤く火照っている……

これってもしかして……

……発情期！？　マジで、ヤバイじゃん。今から俺に襲えと言いたいのか？　上等！！　襲いまくってやるぜって何を言っているんだ俺は。そんなわけねえじゃん。

俺は彼女をおんぶして、洞窟から抜け出した。俺今、現在進行形で絶賛遭難中、早く父さんと母さんを見つけないと。この子の為でもあるけど、一番は俺の為に。

遭難中の俺は何とか父さんと母さんを見つけて、この子を発見した事情を話した。（クマとの死闘？　は口にしなかった。）親が居ないことやその他もろもろ。
するとさ、俺の予想通り……家の子になった。養子に取ったんだけどね。

ああ、俺の平穏の日々が崩れたかもしれないな。

何でこうなった。

それから約一週間が経ったある日、俺は家でつまらんＴＶ番組を見ていた。

ガシャン！　という物音が二階から聞こえた。

「おいおい、マジかよ。こんな時間帯から幽霊が出たとかいうなよ、俺チキンだから幽霊とか全くダメなんだよな。ああ、幽霊とかマジで勘弁してくれよ。小便漏らしそうだよ。」

メッチャ棒読み。

「ああ、怖いよ。ちびるよ～。」

棒読み。

「父さ～ん。母さ～ん。早く帰ってきてよ。」

ガチャンっとリビングの扉が開く音が聞こえた。首を後ろに回して見ると……美少女だと？　美少女の幽霊だと。キャッホーウ！！美！　少！　女！　イエーイ

御ふざけは此処までにしておこう。

「もう、大丈夫なのか？」

「お陰様で、大丈夫です。」

凛とした透き通るような綺麗な声。

「そうか、それは良かった。」

「……」

「……」

会話が続かん。ちょいっとばかり気まずい空気だな。

きゅるるるる～～～っという可愛い音が聞こえた。しかも、彼女の方からだ。

もう一度後ろを振り向くと、全身をプルプル震わせていて、耳まで真っ赤になった顔を下に向けていて、両手でお腹を押さえていた。

正直に言おう。メッチャクチャ可愛い。お兄さんの心臓鷲掴みにされちゃったよ。

まるで、小動物を見ているような感覚だ。撫でたい、愛でたい、ペロペロしたい、お持ち帰りぃぃぃ！！！！！

ハッ！！　危ない危ない、もう少しで理性が崩壊するところだった。何とか踏みとどまった――――――パンツ一丁で……アウトォォォ！

俺完全にスリーアウトチェンジィィ！！

ヤバシ、このままだと。変態という名の紳士から変態という名の変態に成り下がってしまう。なんとか戦況を打破しなくては……気のせいか？　あの子から熱烈な視線を感じるのだが？　視線を向けてみた。

顔を両手で覆っている。うん大丈夫――――

「なわけあるかぁぁぁ！！」

ビクッと体を震わせたのが伝わってくるが、関係ねぇ。ガン見じゃん、メッチャガン見じゃん。両手で覆っているのに関わらず、大きな隙間があるじゃん。指と指の間の隙間空きすぎじゃんか！！　意味ねえじゃんかよぉぉ。

するとまた、きゅるるるる～っという音が聞こえた。

「ハハハハハハ！！」

俺はもう腹を抱えて爆笑するしかない。ああもう可愛い。

必死にお腹の虫の音を隠そうと顔を左右に震わせる。何この可愛い生き物は？　ぐへへへへお兄ちゃんが美味しく食べてあげまちゅよ。

台所に行き、包丁を取り出した。

「何が食べたい。」

包丁を片手に包丁に聞いてみる。

「……」

返事が無い。只の包丁のようだ。

変な空気が流れる。Ｏｈツッコミ無か、そうかそうか。なら、ツッコミをしてくれるまで俺はボケるぞ。それでも良いのか、美少女。

「な、なんでやねん？」

疑問文＋可愛く首を傾げる＝グハッ！！。

「グハ！！」

口から大量の血を吐き出して倒れるイケメン。駆け足で俺の傍まで来てくれる美少女、最後の俺を看取ってくれるのか。それはありがたい。

左手で俺の後頭部に手を差し入れて、頭を起こしてくれる。

目には涙を溜めている。そうか、こんな俺が死ぬことを悲しんでくれるのか。

「……」

何を言ってるんだ。

「はよ、飯作れ。」

ハッキリと聞こえた。

「死にかけの俺にそれは無いっしょ。」

我が生涯に一片の悔い無し。ガクッ。

それから、数年後。俺は中二になった。

これで、いくら厨二発言しても大丈ブイ！！！　一応俺はなのは達が通う中学と一緒だ。しかし、あの美少女は違う中学に通ってもらうことになった。

その時に猛反発を喰らったが、高校は一緒の所を通うという事で決着はついた。

後は此奴の学力なんだが、ハッキリ言おうか。学校行く必要なくね！　それが俺の回答だ。

頭良過ぎ、適当に中学レベルの問題（まだ、俺が四年生の頃）出してみたんだが、全問正解。試しに高校レベルの問題も出したが、殆ど全問正解。

そのままの勢いで大学の問題集を買って、試したところ7割以上はあってた。モーマンタイ。

そして、名前の方だが、父さんと母さんが斬新すぐる名前を出すせいで三日三晩もかかってしまった。

父さんは、来栖星（星と書いてスターと読むらしい。）どこぞの「はがない」に出てくるペガサスさんだとツッコミたくなったが、我慢我慢。

母さん、これは流石にツッコまずには居れなかったよ、来栖流星と書いて（スターダストと読むらしい。）アウトォォォォオオ！！

それ完全にアウトォォォォオ！！

それで、俺の出した案で妥協してくれた。いや、マジで良かった。

来栖星香（くるすせいか）と読む。正直に言って、これが一番妥当でしょう。上二つは父さんと母さんが出した案でも比較的にマシな方だ。あれでも。

あ、俺？　今の俺の名前はメッチャ斬新すぐる――――――――――父さん母さん、この恨み死んでも許さないからな。

来栖一馬。何となく予想は付くと思うけど、これ「かずま」って読むんじゃなくて……「ユニコーン」って読むんだ。

穴があるなら穴に入りたい。いっそ殺してくれ。

プロローグ（後書き）

ギャグ、コメディを書く上でこうした方が良いというのがありましたら、ご教授お願いします。

ギャグ、コメディ系統は不得手ですので、よろしくお願いします。

第二話　クラス（前書き）

基本的に一話一話短いです。

第二話　クラス

新学期。

学校に着いてすぐに掲示板にダッシュ。今日から中学二年生、新クラスの仲間たちを拝見しにいかなければならない。

ある意味、学校の中で一位。二位を争うイベントだ。

まあ、拝見って言っても組を確認するだけだ。何故って？　そりゃ学校でも居眠りｏｒ保健室でサボッテばかりの常習犯の俺にはクラスに誰が居ようと関係ない。

誰にも俺のジャスティスに触れることは出来ない。

という事で、新しいクラスに行きますか――――――主に寝る為に……

その時、彼はシッカリと確認していないのが仇となった。

なぜなら、そのクラスには。

高町なのは。

フェイト＝テスタロッサ。

アリシア＝テスタロッサ。

八神はやて。

アリサ＝バニングス。

月村すずか。

の名前があることに、気づいていなかった。彼がある意味一番絡みたくて、絡みたくない者の名前が全員揃っていることに……。

何時もの俺なら、なのは達＋イレギュラーのクラスを確認していた筈なのに、今となって悔やまれる。確認しなかった事に。マジでミスったわマジで。

イレギュラーの存在。

風間恭仁、彼の名前もあった。

俺のクラスは1組。これで、8年連続1クラスだ。

「俺の席は……あそこか。」

早速カバンを枕代わりにして、

「お休み。」

寝た。その速さにのび太もビックリ。正にのび太に匹敵するほどの速度であった。

一度だけ、なのは達の内、なのはとバーニングとはやてと一緒にな

った事がある。それは去年の話だ。
なのはとバーニングがメッチャ絡んでウザ可愛かった。くぎゅぅ～の声はツボに入る、ゆかり姫の声も良い。

いっつも居眠りしてくる俺に、なのはとバーニングが突っかかってくる。なのはの命令には直ぐに従います。なぜか？　怖いからだ。
去年、なのはを無視し続けたら何処からかクナイが飛んできて俺の額に刺さった。その次の瞬間に、強烈な殺気が俺だけに放たれた。
あんな殺気を浴びたのは初めてだ。死を覚悟したよ、「俺のなのはに迷惑をかけるな！！！！！」っていうシスコンバリバリの思念がハッキリ聞こえたからな。おお、怖い怖い。

バーニングとは、何時も喧嘩だな。

何時殴り合いに発展してもおかしくなかった。なりそうな所で、隣のクラスからバーニングの嫁（？）が飛んできて、止めに入ってくれた。

まあ、なんでバーニングが俺に突っかかる理由は分かっているけど、テストでも負けるのは嫌なんでな。こんなんでも、一応俺は全教科毎回満点で、校内一位で常に二位にバーニングが居る状況だからな。
ｈａｈａｈａｈａｈａｈａ.

はやてとは、話が合うから、彼奴となら同じクラスでも良いかな。

何の話って、そりゃあはやてと言えば……おっぱいしか無いっしょ。
はやてこそおっぱいの聖書だ。
あやつ、此処に通う女子全員のバストのサイズを網羅してやがった。
さいっこうにｃｒａｚｙだ。

今年ぐらいは最高の中学校生活が送れますように……。
その願いも儚く散っていた。しかも、魔導師組揃っているという最悪のクラスで……。

さあ、今日の帰りに翠屋に寄って帰るか。

ＨＲが終わる。１０分間の休憩時間。
誰かが俺を揺すっている……誰だ？　……なんでなのはが居る？？？？？　それより、早く起きなければ殺されてしまう。うん？　他にも沢山の気配を感じるぞ。

目を開けて周りを見渡すと。

Ｏｈ！！　なのは達勢ぞろいで俺の席に集まっていやがる。何て嫌がらせだ！！

ｇｏｏｄ－ｂｙ俺の中学二年生生活。

「何、俺の中学二年生生活が終わりを告げたっていう顔をしてるのよ。」

凄いな、俺の心を読むなんて。

「今、私の事。バカにしたでしょう？」

「ソンナコトアリマセンヨ。バーニング。」

「だから、バニングス！！　いい加減名前ぐらい覚えなさいよ。」

「無理だ。」

「何で、即答なのよ！！」

プンプンっと怒りを露わにしている。カルシウムとれ、または牛乳飲めよ。

「まあまあ、アリサちゃん。落ち着いてよ。」

そこで、バーニングの嫁（俺が勝手に決めつけている）がバーニングを宥めている。そのお陰か少しは興奮が落ち着いたようだ……流石、嫁（？）

「だから、私はアリサちゃんの嫁じゃないってば。」

スマンスマン、知らぬ間に俺の思考が漏れていたようだ。

「一馬（ユニコーン）君のせいで、私に同性愛者っていう噂が流れてるんだからね。」

「頼むから、その名前で呼ばないでくれ。一馬（ユニコーン）だなんて、我が生涯の恥だ。」

バーニングが嫌な笑みを浮かべやがった。

「ねえ、一馬（ユニコーン）。」

「グハッ！！」

吐血！！

甘えるような甘い声で名前を呼びやがった。

「一馬(ユニコーン)ってば」

「ゴパッ！！！！！！」

お口から血がドーン！！　死ぬ。頼むからその名前で呼ばないでくれ。

「ユ・ニ・コ・ー・ン」

「ンゴパ！！！！！！！！！！！！！！！！」

耳元で甘く囁きやがった。畜生！！！！！　くぎゅぅ～の声で甘く囁かれたら、死ぬしかねえじゃん。

「我が生涯一片の悔い無し。」

そして、俺は三度目の死を迎えた。

その頃外野は、

「ねえ、なのは。」

「うん？　どうしたのフェイトちゃん？」

「私たちの入る隙が無いね。」

「にゃははは。」

苦笑いをするなのは。

「はやて、この三人っていつもこうなの？」

「そうやで、アリシアちゃん。」

「一馬（ユニコーン）って面白いね。」

一馬（ユニコーン）には、効果は抜群だ。

「くっそ、誰だか知らねえが。俺のなのは達と仲良くしやがって、コロス。」

風間恭仁が、一馬（ユニコーン）の方を見ながらドスグロイオーラを放ちながらブツブツとつぶやいていた。

第二話　クラス（後書き）

こんな感じで、ほのぼのと行きます。

戦闘は極力少なめで行きます。

来栖星香の登場を楽しみにしている方々、もう少しお待ちください。

第三話　自己紹介（前書き）

更新です。

当然の事ですが、短いです。

第三話　自己紹介

休憩時間も次の授業が始まった。

まだ、新しいクラスになったばかりだから、授業といった授業はしない。一人一人自己紹介をするようだ。

あ～ダリィ～。眠くても、隣になのはという存在が居る為に眠れない。

どうしてこうなるの……

「それじゃあ、自己紹介をする上で、自分の名前と趣味・特技。そして、将来の夢を語ってもらいましょうか。」

教壇に立っている黒髪の美人先生が言っている。概婚者である。

うへぇ～嫌だな。面倒臭いから寝る……出来るわけねえよ。だって、隣になのはだぜ。絶対にシスコン王の攻撃と殺気が飛んでくるって、最悪だ。

珍しく俺は起きている。

着々と自己紹介が進んでいく。先に言っておくが、何でか知らんがこのクラスだけ席順が好きなようにして良いらしい。

まあ、俺は一番左端の一番後ろだ。良い感じに太陽の日が当たって最高の居眠り場所なのに、隣になのは。前にバーニング、右斜め前にすずか。

いろんな意味で楽しくなりそうだ。俺は最悪だがな。

他のメンツの席は、なのはの隣がフェイトに続いてアリシアといった感じだ。

バーニングの前がはやてだ。そして、他のクラスの奴らだ。

風間恭仁は一番右端の一番前だ。俺の席とは完全な真逆だ。

そいで、自己紹介だが右から始めやがった。俺がオオトリじゃねえか。

何が恥ずかしくて来栖一馬（ユニコーン）ですって自己紹介しなくちゃいけねぇんだ。ああ、マジで泣けてくるぜ。

お、風間恭仁が教卓の前に立った。彼奴絶対にクラスに一人は居そうなナルシストそのまんまだな。

実際顔は良いだろうな。男の俺から見てもカッコイイしな……ジャニーズ事務所にでも入ってろバカ野郎が！！！！！。

「風間恭仁です。」

「趣味・特技はスポーツ全般で、大抵何でも出来る。俺に出来ないことは無い。」

おえぇぇぇぇ～～～！！

ウィンクしやがった。

ああ、俺から言わしたら相当痛いぞ。まあ、今の紹介だけで目をハートマークにしている女子どもは色々と人生のやり直しをお勧めするよ。

さて、俺はなのは達の表情を確認してみるとしよう。どんな表情をしているか楽しみだ。

まずは隣の魔王様なのは。

うっわ～汚物・糞を見るような視線で見てるよ。

フェイトは……視線で人を殺せそうなんですが？！　恐いですね。

アリシアは、エチケット袋！！！！！　オブロロロロロロっていう音を出しながら吐いてるぅぅぅぅ。

はやてとバーニング、すずかのよく表情後ろ姿で分る。絶対に負の感情で見てるよ、彼奴嫌われるのか？まあ、俺には関係ないか。

「将来の夢は、まあこの俺のイケメンフェイスを生かして色々なことをやりたいな。例えば世界一イケメンなアクションスターになっても良いし、この美声を生かして歌手でも良いや。」

ナルシ発言が嵐の様に炸裂しやがった。誰か止めに入れ、そして女子！！　なに目ん玉キラキラ星させてやがる。

だれか、止めろよ。なのは達も耳を塞いでゲッソリしてるぞ。アリシアなんてまた吐いてるぞ……計十回ほど。

……１０分後、やっと終わりを告げた。

はい決定。俺の中でコイツは相当ウザい奴だと認定されました。はい拍手、ぱちぱちぱちぱち～～
脳内で俺の分身たちがスタンディングオベーション。
初めてだ、お互いに一言も話を交わさずに俺がウザい奴に認定するなんて、奴相当やるようだな。

その後、彼奴は俺に対して強烈な殺気を向けてきやがった。俺が何をした、只滅茶苦茶ウザい野郎に認定しただけだろうになんでそんな事で、殺気を向けられなきゃならんのだ。

それから、モブキャラの自己紹介が進んでいき。
アリシア＝テスタロッサの順番になった。露骨に風間を遠回りするように、一旦俺の列まで来て教卓の前に出た。

「アリシアちゃん、恥ずかしがらずに俺の傍を通ればいいのに。」

あんなセリフを言う奴がマジで存在したんだな。今の言葉を聞いたアリシアが、無表情になった。今の言葉はキツイな、男の俺でも吐きたくなったわ。マジで。

「アリシア＝テスタロッサです。私はあそこに座っているフェイトの双子に姉です！！」

うん、元気一杯の子はお兄さん大好きですよ。

「え～っとね。趣味・特技はね。運動する事と運動！！」

君はアホな子決定ね。

「将来の夢はね、まだ決まってないけど。楽しく過ごせたらそれでいい。」

その意見には俺も賛成だ。君はアホな子だけど、話が合いそうだ。

君はアホ犬で決定だ。

それから、モブキャラの自己紹介が進んでいきフェイトの番になった。

さて、なのはの嫁（？）はどのような自己紹介をしてくれるのか？

思えばさ、結構楽しんで無いか俺？　気のせいか。

こやつも、アホ犬と同じように風間恭仁の事を遠まわしに浮かしながら教卓の前に立つ。そして、また彼奴がウザったいキザなセリフを言っていたが、彼奴の言葉に一々耳を傾けていたらバカになる。

「フェイト＝テスタロッサです。」

うん、落ち着いた物腰。流石執務官。

「趣味・特技は……家事（火事）です。後は、走るのが速いです。」

うん？

「よろしくお願いします。」

家事が火事って聞こえたのは俺の気のせいか、気のせいだよな。そうだよな、俺の気のせいに決まっている。

「あっ？！　夢はまだ決まってませんが、強くなりたいです。」

こうして、フェイトの自己紹介も終わった。強くなりたい？　夫（？）のなのはを負かせる位にか？　そりゃあ無理だろう。彼奴は魔王だからなｈａｈａｈａｈａｈａｈａ！！！！！　何か隣からおっそろしい視線を感じるのですが……

（後でオ・シ・オ・キ・ね♪）

お口がそのように動いてました。Ｓｈｉｔ．ミスったか、俺の思考が読まれるなんて。しかもあのなのはに読まれるなんて、屈辱だ。

だが実際なのはは、「後でお話ししようね♪」っという感じで、親しみをもった感情を込めていたのだが一馬（ユニコーン）のなのはに対しする先入観の為か、そういう風に感じていた。

そいで、またモブキャラの自己紹介が進み。月村すずかの番に回った。

「お！！　愛しのマイエンジェル！！」

すいませ～ん。誰か彼を精神科に連れて行ってください。脳が腐ってますよ、日本の汚点が此処に存在しています。誰か彼を暗殺してください。それが世界平和につながる第一歩ですよ、誰か彼を抹消してください。

「あの、先生。」

「何でしょうか？　月村さん。」

「具合が悪いので、保健室に行きます。」

「そうですね。顔が真っ青ですし、直ぐに行ってください。」

「はい、先生。ありがとうございます。」

真っ青って言うかさ、死人みたいな顔色になってますけど？　ドンマイ。

まあ、彼奴が絡まないわけないよな。

髪を掻き上げながら颯爽とすずかのもとに行く。正直に言ってバリキモス。

人間として終わってやがる。

うわぁ～露骨に嫌な顔をしてるよ。流石に可愛そうだから助け舟出してやるか。

「先生。」

「どうしましたか？　一馬君（ユニコーン）。」

「ゴパ！！！！！」

と・け・つ！！！　だが、之で。

「先生、吐血したので保健室行っていいですか？」

「吐血したんですか？」

「はい。」

よし、これで保健室に

「ダメです。」

「はい？」

「先生、今なんて言いました？」

「あら、一馬君（ユニコーン）は耳が悪いのでしょうか？」

「グハ！！！！！」

だから、その名前で呼ばないでくれ。と、吐血が。

「そんな、リアルな芝居しなくていいですよ？」

「いや、先生。これはし」

「しなくていいですよ。」

「いや、だから先生」

「しなくていいですよ。」

「いｙ」

「黙れ、豚野郎！！！！！」

「はい。」

何このクラス。冥王様がいらっしゃるよ、談笑していた生徒が一斉に黙り込んだよ。普通さ生徒に向けて豚野郎は無いんじゃない？せめてウンコクズでしょう。

こんな感じでグダグダで、時間が過ぎていき。俺まで回らずに自己紹介は終わった。

ああ、俺の名前が知れ渡ってしまった。一馬（ユニコーン）は辛いよ。

「「あれ、うち／私の自己紹介は？」」

時間が足りず回らなかった。

第三話　自己紹介（後書き）

ウザいですね～風間恭仁♪

第四話　mission?捕まるな　（前書き）

更新。

一馬（ユニコーン）が変態になった。

第四話　ｍｉｓｓｉｏｎ？捕まるな

今日という一日の退屈な学校が終わった。

カバンを持って帰ろうと立ち上がった時。肩をガってされました。

怖いので少しずつ顔を後ろに持って行きました。

「あの～魔王（なのは）様。私のような下郎に何かご用でしょうか？」

「もぉ～なんで自分を卑下するような言い方するの？」

それはね、あなた様が怖いからであります。最近、自分のキャラが分らなくなってきました。

「何で、勝手に帰ろうとするの。お話しようって約束したのに。」

「ｗｈａｔ？　Ｉ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｋｎｏｗ」

「何でそんな事言うの？」

「Ｗｈｙ，　Ｉ　ａｓｋ　ｔｈａｔ　ｏｂｖｉｏｕｓ？」

「それは。」

「それは？」

「なのはが『可愛いからだ』！？！？！？！？」

誰だ?！　何てこと言いやがる。後ろを振り向くと犯人が俺の後ろでしゃがんでしてやったりって顔をしてやがった。

なのはは、顔を真っ赤にしているがそんな事を気にしている俺ではない。

「おいはやて。どういうつもりだ?　アアァン！」

「にししし。」

何、悪巧み成功したっていう顔をしてんだよ。この後に俺に降りかかってくる不幸を知っているのか！

「一馬(ユニコーン)。どうしてなのはには、可愛いって言うのに。私の場合はバーニングって言うのかしらね。一馬(ユニコーン)?」

ほらね、来たでしょ。不幸の権化が――――――――――どっかに糖分王国への入り口が……

吐血している暇なんかねえぇぇぇ！！　怖いよ。炎王が俺の両肩をガってしてきたよ。

「どうしてかしれねぇ?」

「ハハハハハ。どうしてだろうな?」

「アハハハハハ。」

バーニングの滅茶苦茶怖い笑い声に、話をしていたクラスメイトが一斉に静まり返って顔を青くしている。ナイスコンビネーションな

のか？

そして俺とバーニングは最恐のバンドを組んだ。Ｂａｄ　ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｉｏｎ．（後のＢ、ｚ）

「ハハハハハハ。」

頬を引き攣らせた逃れられない苦笑い。

「「アハハハハハハ。」」

二人の笑がとうとう合わさる時、一馬（ユニコーン）の逃走劇が始まる。

回れ右からの、

「Ｂダッシュ！！」

「逃がすかぁぁぁぁぁ！！！！」

物凄い形相でバーニングが追いかけてくる。赤鬼も青鬼も尻尾を巻いて逃げる勢いだ。

「はやてぇぇぇぇぇぇぇ！！　てんめぇぇぇぇぇ！！　明日覚悟しとけぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

「ほんじゃ、頑張ってな。」

メッチャ他人事何ですがねはやてさん。明日ハヤテ、オモチカエリ、タベル。マジで覚悟しとけよ。

「ほわちゃあぁぁぁ！！」

「うわっ！！」

マーシャルアーツキックしてきやがった。ちょっと掠ったぞ。どんだけ武術レベルが高いんだ、バーニングは。

捕まったら殺されるな俺。ガチのリアル鬼ごっこやん。

一応バーニングを巻くことは出来たが、易々と学校を出ることは出来ないだろうな。アイツの勘は恐ろしいほどに当たるからな。それに捜索レベルも高いし、さて何処に隠れようか？　今隠れているところも何時かは絶対にばれるが、検討はなかなかつかないだろうな。凄く意外なところだからな。

現在、俺が隠れているところは、四階の女子トイレの一番奥の個室だ。何か新年度早々やらかした気がするが、気にしたら負けなんだろう。

普通なら女子禁制の男子トイレに隠れるんだが、彼奴の事だ。直ぐにバレる。ならその裏をかいて男子禁制の女子トイレに身を潜める。これこそかくれんぼの鉄則。

女子更衣室でもＯＫだ。

さて、それはそうとどうやって出ようか？　今この女子トイレに女子が集団で入ってきて出るに出れない状況にある。しかも、彼女ら

は先輩だ。

此処で出たら変態という名のレッテルが張られてしまい、学校全土に知れ渡ってしまう。ましてや、家族にも知られてしまう。それだけは避けなければならない。

特に星香にばれたら、ｓｅａｒｃｈ&ｄｅａｔｈという状況になってしまう。まさしくｄｅａｄ　ｏｒ　ｄｅａｔｈだ。

此処から脱出する為の選択肢は一応何種類かある。

一つ、変態という名のレッテルを張られる覚悟で出る。

一つ、全員居なくなるまで耐えきる。

一つ、女装をして逃げる。これはダメだな、男としての大切な何かが失ってしまいそうだ。それか、何かに目覚めてしまうかもしれん。

いや、もう一つある。それは――――――――――――パンツを被って顔を隠す……そうだ、これが一番良い。これなら顔をばれなくて済む。よし、思い立ったが吉日だ。

しかし、誰のパンツを被ろうか。流石に自分のパンツを被るのは辛いな。出来れば女子のパンツがあれば一番良いんだけどな。そんな都合の良い話あるわけないか。

自分のカバンのチャックを開けて探ってみた。

結果――――――マジでパンツとブラジャーが入ってた。色はピンクで、Tバック。ブラジャーも色はピンクで生地が薄い。もう言わんでも分る、これは星香のパンツとブラジャーだ。何で入ってるんだ？　俺は入れた記憶はないハズ――――――多分。

記憶を探ってみようか。

今日の朝

「ユー君。起きてください。朝ですよ。」

星香が何時もの日課。俺の部屋に来て俺を起こすという至福のタイム。

星香は俺の事を「ユー君」って呼んでくれる。一馬（ユニコーン）って呼ばれるよりマシだが、「ユー君」もキツイ。

なぜか？　そりゃあ、「ユー」の後に「ノ」をつけたら淫獣の名前になってしまからだ。それでも一馬（ユニコーン）って呼ばれるよりマシだ。

「むにゅあ～後、五分。」

寝返りをうつ俺。当然だが狸寝入りをしている。

「分りました。」

あれ、なんか聞き分けが良いな？　どうしてだ。

殺気！！！！！

俺は転がるようにして、ベッドから逃げて直ぐにドスッ！　ていう音が聞こえた。確認して見るとね、俺の頭のあった位置に国語辞典と漢字辞典の二つの角が突き刺さっていたよ。枕には大穴が空いてた。

凄いね。国語辞典と漢字辞典の角って枕にも穴を空けることが出来るんだ……

「あの～どうやったら、辞書の角が枕を突き破っているのですか？　星香さん。」

「どうしてでしょうかね？」

笑っているが目が全く笑っていない。恐いです。只、逆らってはいけないと本能が告げている。

「あの～どうして、広辞苑なんて凶器を掲げているのでしょうか？」

「簡単ですよ。」

「教えてくれるとありがたいのですが。」

「ユー君を、殺して私だけの者にする為です。」

ヤンデレ化していた。誰か助けて、俺に安息の地を与えてくれ。

それからの記憶が無いんだな実際。気が付いたら制服姿に着替えていて、カバンも準備されていて、リビングのテーブルに座らされていたな。何事も無かったように朝食を食べて、学校に来たな。

星香。俺の記憶が無い時にカバンに入れやがったな。

さて、今の俺の状況を整理してみようか。

先輩方の女子トイレの一番奥の個室に入っている。

片手に女子のパンツとブラジャー片手で皺がつくほどしっかりと握りしめている。

それを被って此処から逃走しようと考えている。

変態という名の変態だな。だが、決して俺は変態ではない。紳士だ。

だが、この状況を誰かに見られたら社会的に終わるね俺。

下手すりゃ警察にお世話になっちゃうぜ……ヤバイ。色々と前言撤回、女子トイレに籠城しようそれが一番良い。

それから、１時間後。やっとの思いで学校から出ることが出来た。

運良くあの後、直ぐに女子たちがトイレを出た。その隙に誰にもバレることなく俺も脱出して、一応学校全域を回った。

バーニングは諦めて帰ったと分かった。

今は校門を出て直ぐの所に俺は居る。正座の状態で……

何で正座をさせられているのか？　簡単だ、バーニングが校門でＳＰに見張ってもらっていた。俺が学校を出たのを確認してＳＰが直ぐにバーニングに報告。

その次にＳＰに捕まった直後にバーニングが来る。

そういった流れで、俺は捕まった。両手に超硬合金で出来た手錠をされていて、バーニング様の片手には最高１０万ボルトまで出力が出せれるスタンガンを持っている。

スタンガンがさっきからバチバチ鳴っているのですが？　なんでバーニングはそれを俺に近づけているのですか？　そんなのされたら俺死ぬよ……多分。

「さて、どんな処刑が良いかしらね。」

「１０万ボルトの刑。目に１０万ボルトの刑。それとも全部？」

「それ、死ぬぅぅぅぅぅ！！　俺死んじゃうよ！！」

嫌だ。俺はまだ死にたくないよ、まだヴィヴィオのパンツクンカクンカしてないのに死にたくないよ、食べても無いよ。

「ハッ！！！！！」

「汚物は死んだ方が良いようね。」

「嫌だ、止めて、死にたくない。」

「だいじょうぶ。死なない程度で止めるから。」

「それって、死ぬ一歩手前までやるって意味で良いのですか？」

「あら、良く分ったわね。」

目が全く笑っていないですよバーニング様。

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁああああ！！！！！！！！」

そこからの記憶が全くない俺は、気が付いたら夜になってた。

第四話　ｍｉｓｓｉｏｎ？捕まるな　（後書き）

一馬（ユニコーン）は、運に見放されていますね。

第五話　一馬（ユニコーン）の休日その１（前書き）

今回も星香が出るんですが、書いてて星香に萌えました。可愛い。

第五話　一馬（ユニコーン）の休日その１

新年度始まっての初めての土曜日であり、休日。

休日になるまでの学校生活で、俺はずっと保健室でサボっていた。でないと、居眠りが出来ない。俺の隣に冥王様がいらっしゃる。

もし、寝ていたらなのはが俺を起こすのに時間がかかり迷惑になってしまう。そこは良いのだが、クナイが飛んできて俺の額にぶっ刺さるんだ。その後に「俺の妹に迷惑をかけるな」っていう思念と人を殺せそうな殺気が飛んでくるんだ。

それにより、痛いっていうか傷口がヒンヤリして起きてしまうんだ。

……何時か小太刀が飛んできて、殺されそうなんですがね……全く笑い事じゃない。

保健室でサボっていてもバーニングがやってきて、マンマミーアになってしまう。

……最近学校で居眠りが出来ない。なえる。

この世にバーニングと冥王様が居る限り、俺に安息の地は無い。断言してもいい。

やっとの事で学校という鳥籠を脱出して、念願の休日イェーイ。

今回こそゆっくり寝るぞ！！　その思いも簡単に砕け散っていた。

前日の夕食時。

「一馬（ユニコーン）。」

母さんが俺の名前を呼んだ。

そういえば母さんの名前を紹介をしていなかったな。

来栖美麗（くるすみれい）って言うんだ。今年で三十後半に入るんだが、顔が結構な童顔な為か二十代前半って言われてもなんら遜色ない母さんだが、頭のネジが何本か吹っ飛んでいる。

実際、遠い親戚送られてきたタワシをウニと勘違いをして、食卓にウニ（タワシ）の姿煮という素晴らしい料理を作ってくださった。

だから、料理は何時も俺が作っている。そこで何時も星香が手伝ってくれているから、助かっている。

それを父さん。来栖麗司（くるすれいじ）は、食べたんだ。タワシを泣きながら、口から血を流しながら食べていた。その時の父さんを見て悪鬼羅刹という言葉が一番最初に浮かんでしまった。それほどの形相で食べていたんだ。

父さんは、バリバリビジネスマンだ。会社の方でも凄く重宝される人材らしい。

「明日から、麗司さんと一か月以上の海外旅行に行ってきますね。」

「うん、わかった……はいいいいいいい！！！！」

今、なんて言ったんだ。俺の聞き間違いじゃ無ければ、「明日からお父さんと一緒に一か月の海外旅行に行ってくる。」だと

「美麗。何を言っているんだ、明日から一週間だよ。」

「あらあら、そうだったかしら。」

首を傾げながら、頬をに手をやった。そういえば、もう一つ忘れていた。

母さんは重度の天然で、男殺しなんだ。色々と天然なせいで母さんに告白をしてくる男性が後を絶たないんだ。最近は減って来たよ週に五回に減ったよ、え？！　前はどのぐらいだったかって、そりゃあ一日の平均が5回位だったよ。

父さんもその時の気苦労。見ていて可哀想だったよ、母さんはそんなのお構いなしだったからね。告白されたことをいつも家族全員がそろう夕食時に話していたんだよ。

本当に父さんを見ていて、可哀想だったよ。

「そんな事よりも、明日星香と一緒に此処に行ってきなさい。」

そういって、父さんにとあるテーマパークのペアチケットを受け取った。

「「……はい？」」

息がピッタリの俺と星香。

「そういう、事だから明日からよろしく。」

そういって、父さんは母さんをお姫様だっこして二階の夫婦部屋に消えていった。残された俺と星香は呆然としていた。

「……」

すると、突然星香が俺の服の裾を摘まんだ。うん、こういう小動物的な行動が可愛いんだよなコイツハもう。頬を緩みまくった。

「ユー君。私は行ってみたいです。」

そういう風にお願いされると、断れるわけないじゃん。

「了解しました。お姫様。」

「本当ですか！？」

急に顔を近づけて、嬉しそうに聞いてくる。星香の顔が目と鼻の先にある。

年頃の俺には……この距離はヤバイ……心臓が高鳴る。

「あっ！　すいません！！」

顔を真っ赤にしながらバッと離れた。もうちょっと見ておきたかったなっていうのが俺の本心だ。心臓は爆発しそうな程、高鳴ってい

たけど。

「大丈夫だよ。」

平静を装っているが、正直いって色々とヤバイ。顔を近づけた時に、女性独特の甘い香りが鼻孔を擽ったのだ。俺の息子が反応してしまった。

にしても、やっぱり星香は嬉しそうにしている表情は可愛いな。特に顔を赤くしたときなんて、特に可愛い。

もっと、感情を表に出せば良いのに……もったいない。

「なあ、星香。もっと感情を表に出せよ。可愛いんだから、もったいないぞ。元も凄く可愛いんだから。」

「なっ！！！　なななななななな！！！！！！」

耳まで真っ赤にして、もの凄い速度で後ずさりをした。面白いな星香は、

「なって言い過ぎ。」

「からかわないでください！！　恥ずかしいじゃないですか！！！！　もう。」

そんな顔をして、怒られても困る。メッチャ可愛い。

「……冗談じゃないのにな。星香が可愛いのは、本当の事だし。」

ピキーン！！　と全身をマネキンのように固まらせた。可愛面白い星香。

「イヤァァァァァアアア！！！！！」

叫びながら、二階に上がって自室に閉じこもったまま、出なくなってしまった。

何度も言うようだが、星香は贔屓目無で可愛い。

もう、風呂には入っているし自室に戻って明日のために寝ることにした。

金を下さないといけないな。

明日は平和に過ごせますように、割とガチで……

第五話　一馬（ユニコーン）の休日その１（後書き）

いやぁ～～星香は可愛いですね。嫁に欲しいぐらいです。

第六話　一馬（ユニコーン）の休日その２（前書き）

更新です。

家を出るまでの、ちょっとした風景を書きました。

第六話　一馬（ユニコーン）の休日その２

とうとう、休日の土曜日。

珍しく目覚まし時計を使用して、６時前に起きた。もう父さんと母さんは荷造りをして、海外旅行に出かけていて、家には居ない。

うん、今日一日は平和に過ごせそうだ。ガチでお願いしますよ、神様。こんなに運に見放された俺にも、今日ぐらいは平和に過ごさせてください。

初めて、朝日の出に向かって座禅を組んで、合掌したよ。効果があるといいな……無かったら、星香が可哀想だ。

自分の部屋から出て、リビングのドアを開けようとした時、中からジューっていう音が聞こえた。

「星香なのか？」

星香にばれない様に小声で呟いた。という事は星香が料理をしている事なのか？　アイツ料理できるのか？　毎回手伝ってもらっているけど、手伝いと料理をするっているのは思っているより全然違うものだからな。特に調味料の量とか、味付けの感覚とか、手伝いだけじゃ分かりづらいからな。

まあ、大丈夫だろう。母さんみたいにタワシをウニと間違えたりしないよな。

俺はアイツの事信用しているからな、邪魔しちゃ悪し……なら、もう少し寝るか。後、小一時間ほど寝るかな。

物音を立てないように自室に戻って、俺はムラムラしていた。

よく、考えたら今から一週間星香と一つ屋根のしたで二人っきりで過ごす事になるじゃん。ヤバイじゃん、俺の理性保かな。無理そうな気がするが、頑張ってみますか。

星香を襲って、嫌われたくないし。何をとっても、星香を傷つけたくないのが一番だしな。

そして、もう一度俺は眠りについた。

「ユー君。起きてください。」

「お願いですから、ユー君。起きてください。」

ユッサユッサっと揺らされる。ああ〜何か気分が良い。気持ち良い。

「でないと、」

でないと何だね星香？

「辞書の角の錆びにしますよ。」

「起きます。起きさせていただきます。」

ベッドからジャンピングして、飛び起きる。辞書の角攻撃はマジで洒落にならんからな。昇天してしまうわ、俺Ｍじゃないから攻められると弱いの。

「早く、着替えて顔を洗って、歯磨いてくださいね。」

「へいへい。」

そういって、俺の部屋から出ていく星香。

「何かさ、新妻化してきてないか？　俺の気のせいだと良いんだが……それとも、何だろうな？」

タンスからジーパンと白のちょっとした柄の入った服を取り出して、着替えた。寝間着を持って部屋を出て洗濯機に叩きこんだ。

中に星香の下着も入っていた。うん、良いものだな。

無意識に俺は握っていた――――――――星香のパンツとブラジャーを、しかも俺は、それをクンカクンカしていた。故に俺は気づけなかった。

「ゆ、ゆうゆゆゆゆゆっゆ！！　ユー君、何をしているんですか！？！」

俺の変態行為を見られていることに、

「ハッ！？」

俺は今何をしていたんだ。それにこの生温かくて良い香りを出している物はなんだ？　顔に張り付いている布を手に持って確認した。……俺ってばヤラカシタ……アハハハハハ。ヤッバーイ！！

「アノ星香サン、コレハデスネ。魔ガサシタトイウカ、ナントイウカ。」

「ユー君。」

メッチャ怖いです。ハイ。

「ゴメンナサイ。」

その場でジャンピング土下座。膝が割れるかと思った。膝すんごく痛かった。

殴られる覚悟であったが、殴ってくる気配が全く見られない。はて、どういう事だ？　顔を上げて見ると、顔を真っ赤にしている星香の顔を見た。

あっれ～俺が思っていた展開と全く違うのですが、どういう事なんでしょうか？

「言ってくれれば、脱ぎたての下着を渡していたのに。」

星香は何を言っているんだ？　ぶつぶつといった感じで何を言って

いるのか聞き取れないんだが。
俺が不思議そうな表情をしていると、プイって顔を明後日方向に向けた。
「何でもありません。それに、早くしてください。」
「あ、ああ。」
立ち上がった。膝がヒリヒリして痛い。

リビングの椅子に着いて、星香の用意してくれた朝食を食べた。メニューは日本人の代表的な朝食、みそ汁と白米。特にみそ汁は文句なしにうまかった。
食器を洗い片づけて、一旦自分の部屋に戻り身だしなみやその他諸々の準備を完了させた後、戸締りを確認した。
「星香、裏手のドアは閉まっているか？」
「ハイ、今閉めてきたので大丈夫ですよ。ユー君の方こそ、大丈夫ですか？」
一応確認したが、問題なし。

「俺の方は問題なしだ。」

俺の言葉を聞いた星香は早歩きで俺の傍までやって来た。

「じゃあ、早く行きましょう。」

俺の腕を引っ張る星香は、良い笑顔をしていた。

第六話　一馬（ユニコーン）の休日その２（後書き）

次回、遊園地。

日曜日に更新できたらいいな。次回は何時もより多めにする予定です。

第七話　一馬（ユニコーン）の休日その３　（前書き）

活動報告通りに、土曜日に更新しました。

休日はその５まで書く予定です。

第七話　一馬（ユニコーン）の休日その３

家を出て、１０ｍ位歩いた所にバス停があるので、そこまで歩いた。

ここで俺の服装をご紹介しよう。
柄物のＴシャツに黒色の上着に、ちょっとしたアクセントにネックレスとブレスレットをしている。ズボンは紺色のジーパンだ。それと、何時もは地味な黒色の眼鏡をかけているが、今日は柄の入ったオシャレな眼鏡をかけているよ。言っておくけどこの眼鏡伊達じゃないよ、きちんと度が入っているよ。自慢じゃないが俺ってそんなに視力良くないからな。
財布はシーパンの後ろポケットにいれてある。
今日のために貯金箱から、５万円ほど取り出してきた。平凡な中二にとっては結構な出費だと思う。でも、他の最近の中学生はリッチだからお財布事情はそこまで分らん。特にバーニングとかすずかとかな……金持ち爆発しろ！！！！！

そんな俺よりも、星香の方が気になるだろう。正直に言って萌えたし、メッチャクチャ可愛い。
こんな可愛い子が嫁だったら、幸せな家庭を築くことが出来そうだ。
星香は、ゴチャゴチャと飾らずに結構シンプルに決めていた。
細身のパンツに、小花柄のワンピースを重ねていた。当然ワンピースの色は白。
片手には大き過ぎず、小さ過ぎないバックを持っていた。何時もは髪型をサイドポニーにしているのだが、今日は髪をおろしていた。

うん、凄く似合っている。それと、同時に俺と星香が一緒に歩いていて、俺は見劣りしていないだろうか？　それが少し心配した。星香と一緒に出掛けるから、結構身だしなみには時間をかけたんだよな。まあ、それは二の次だな。

なんたって今日の一番の目的は……

「星香、今日は楽しめよ。」

「はいっ！！」

元気百倍の返事。これなら、突然現れたアソパソマソに襲われても大丈夫だな。

そう星香が楽しんでくれることが一番なんだからな。バスに乗り、二人掛けの座席に座った。約十分間バスに揺られること、目的の駅に着いた。

貰ったチケットの遊園地の場所が、隣街。ここ海鳴市より少し大きな街だ。

それで、その場所ははやての住んでいる街でもある。よくよく考えてみると、はやてって海鳴市の隣街に住んでいるんだよな。

絶対に見つかりませんように……こういう時に限って見つかる可能性が大きんだよな……特に俺の場合は……何も無いと良いけどな。見つかったら「不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」て喉がつぶれるぐらいの大声で叫んでやる。

だから、今回だけは大っ嫌いな神様に神頼みしてやるから、叶えろよ。俺の願いを……なのは達に遭遇しないっていう願いを……もし、見つかったら、俺は修羅になって神様という名のクソジジイをぶっ殺してやるからな覚悟しておけよ。

電車に乗って、また揺られる事３０分弱。目的の駅に着いた。

早く着いてほしくて堪らないのか、星香がダッシュで電車から降りた。その際に、入ってくる人とぶつかりそうになった。星香はすぐに「すいません。」と頭を下げた。

「ユー君。早く来てください。」

「急がなくても、バスの時間には間に合うよ。」

「それでもです。」

「はいはい。」

駅前のバスに乗って、遊園地前のバス亭で降りる予定だ。改札口を抜けて、そのバス停の所まで行った。

うん、ヤッパリ列が出来ていた。その中でも若いカップルが多いな。特に１６才～２０才位までのカップルが多く並んでいた。

当然、中には家族連れの人たちも居た。

その中に俺たちも並んでいる。位置的にいうと、列の半分から前位の位置に居る。確実に座れる位置だ、電車の時は座ることが出来ずに立っていたからな。

「ユー君。今日は楽しみましょうね。」

「当り前だろう。楽しまないと損だしな。」

俺と星香は一緒の事を考えて居たらしく、一緒にクスクスと笑いあった。

流石にこんなに人が行き交うところでは大笑いはしたくは無いし、恥ずかしいからだ。それは星香も同じだろうな。

それにしても、星香の笑った時の笑顔は可愛い。星香が笑った時に結構な数の男が星香を見て、顔を赤くしていやがった。ふふん、良いだろう。

今から星香と一緒に二人だけで、遊園地を回るんだ。俺は勝手に優越感に浸っていた。

そういう俺も、星香の笑顔にやられて真っ赤にしていたのは秘密だぞ。分ったな。

でもさ、そう考えるとな。高町達も可愛いし綺麗なんだよな、バーニングもそうだけど。

偶に思うんだ、俺の周り可愛くて綺麗な女子多くないかってな。今、こんな思考を巡らせるのはあまり良くないし不謹慎かもしれんが、つくづくそう思ってしまうんだよな。

「イタッ」

太ももに鋭い痛みが走った。星香が俺の太腿を抓っていた。

「今、何を考えていたのですか？」

しまったな。俺の思考が表情に出ていたか、仕方ないこうなったら。

「まあ、星香の事を考えて居たよ。」

耳元でボソッと呟いた。流石にこんなセリフを一般人に聞かせたく無い。俺が恥ずかしい。

当然だが、星香は、

「ハゥ～」

顔を真っ赤にしていた。星香もやっぱり場所を弁えている。こんな所では叫んだりはしないが、誰が見ても分かるほどに顔を真っ赤にして俯けていた。

何時もクールビューティーの星香が、こういう風に感情を出すだけでギャップがあって萌える。

バスがやってきた。何時までも顔を真っ赤にして俯いている星香の手首をつかんで、引っ張っていく。

「何時までも、ボーっとしてたら迷惑だろう。」

「あ、そうでした。すいません。」

星香は後ろの方にを向いて、頭を下げた。誰も星香に文句を言った

りせずに、気にしないで良いよってみたいな感じで対応してくれた。何度も思うけど、ここ等辺に住んでる人達って良い人多過ぎ。

バスに乗って、二人掛けの座席に座った。

俺はずっと、星香の横顔を見ていた。だって、見ていて飽きないんだよ。

さっきから星香の表情が変わっていっているんだ。それが、徐々に遊園地に近づくにつれて、頬を緩んで行っている。更に視線をあっちにキョロキョロ、こっちにキョロキョロさせていていた。何なのこの可愛い小動物は！！！　俺を萌え殺す気ですか？！

星香の嬉しい時の色々な表情を見ることが俺得。

バスに揺られて約１０分。遊園地前に着いて、俺ら二人は金を払って降りた。もちろんお金は俺持ちだよ。

星香の方に視線を移すと、まあそこには予想通りの満面の笑みの星香が居た。

「星香。」

「何でしょうかユー君！！！」

嬉しい気持ちを全く抑えきれていない様子だ。Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ.

ｍｙ　両親。星香はさっきからずっと良い笑顔をしてますよ。

「ｇｏｏｄｊｏｂ！！！！！」

父さんと母さんが居るであろう、方向に腕を伸ばして中指を立てた。マジでｇｏｏｄｊｏｂだ。

すると、突然。腕をグワンッと引っ張られた。一瞬、肩が脱臼するかと思ったぞ今の勢いは……星香が俺の右手を両手で持って、引っ張っていた。

「早く。早く行きましょうユー君。」

そんな純真無垢な瞳で見つめないでくれ、俺には眩しすぎる。俺の両目が某ムスカ大佐みたいに「目が、目がぁぁぁぁぁあ！！！」てなってしまうぞ。それでも良いのか？

「そんな、急がなくても遊園地は逃げたりしないよ。」

「それでもです。早く早く！！」

「ヘイヘイ。」

息子、娘に急かされるパパの気持ちってこんな感じ何かな？　何か凄く嬉しい？　表現が難しいが、多分嬉しいっていう表現が一番近いだろう。

俺は星香のダッシュに引っ張られてた。フリーパス付のペアチケットを入場門の係員に渡して、遊園地に入ったその瞬間。

「ワアーーーー！！！」

星香が両手を広げて感嘆していた。ここの遊園地はな、最近できたばっかりで、しかも敷地面が某ねずみランドに匹敵するぐらいの広さなんだ。

うん、アホみたいに広いな。これじゃあ、完全制覇できそうにないな。まあ、今日の趣旨は――――――思いっきり楽しむことだ。

さあ、今日は思いっきり楽しむぞ。

第七話　一馬（ユニコーン）の休日その３　（後書き）

次回は遊園地編です。

第八話　一馬（ユニコーン）の休日その４　（前書き）

更新です

第八話　一馬（ユニコーン）の休日その４

星香は早速、パンフレットを広げている。最初はどれに乗ろうか吟味をしているようだ。
目が物凄く真剣。少し近寄りがたい雰囲気を出している。
星香、お前どんだけ真剣なんだよ。もうちょっと楽にしろよ、じゃないと肩が凝るぞ。
気が付けば、俺は額に手を当てていた。仕方ねえな。
「星香、行くぞ。」
「え、あ！　ちょっと！？」
星香の手首を握って、歩き出す。
「星香、こういうのは直感だ。アトラクションの名前でも何でもいい。これだって思ったものに乗ればいいんだ。分かったな。」
コクコクっと頭を縦に振った。
「よし、行くぞ。」
「お、おおお」
今日の星香はノリが良い。いつもこんな事してくれないのに……まあ、いつも通りの星香が一番いいけどね。

「ユー君。私はあれが乗りたいです。」

「マジで言ってるのか。」

「はい。大マジです。」

「ＯＫ．やってやろうじゃねか。」

そういって係員に眼鏡を渡して乗り込んだのは、このテーマパークの一番の絶叫マシーン。その名も「ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ」生きるか死ぬかだ。

早速、先頭に乗った。こうなったら自棄だ！！　きやがれ！！　……正直言いますと俺、絶叫系は全くダメなんだよね。生きて居れるかな俺。

隣の星香の顔を見てみると、うん、笑顔で何よりだ。俺も男だ、星香の為に命を賭けるか。只の絶叫マスィーン如きだがな――――――アハハハハハ。オレシンダ。

「ユー君、楽しみましょうね。私すごく楽しみです、良くテーマパークのＣＭが流れた時にこういう絶叫マシーンに一番に乗ってみたかったんです。」

ガタンガタンっと動き出すコースター。しかし、俺には星香が何を言っているのかが耳に入っていなかった。

「だから、ありがとうございますね。」

屈託の無い笑顔、しかし、俺にはそれを見る余裕すらなかった。今の俺は悟りを開きかけて、

「いるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」

「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

垂直と言っていいほどの落下。死ぬぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！　チキンハートの俺。死ぬぅぅぅぅぅぅ！！！！　隣で、黄色い声で叫んでいる星香の様子を見る暇なんて全く無い。

そして、とうとう「ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ」と名付ける由来になったポイントまで来た。よし、これで最後だ。これで降りれる。

だが、俺はまたも地獄を見たんだ。

コースターが垂直に昇っていく。しかも、相当な高さだ。何でこんな時に限って頭が冷静になってんだよ！　嫌な事を引っ張り出してしまったじゃねえか。この高さ確か、殺しって書いて５６４ｍって読むんだったよな。それで、頂上まで行ったらそのまま背中向きで落下していくんだよな。グネグネ曲がったり回り捻ったりしながら……ありえねえよ。俺確実に死んだな。

もうありえねえよ、高さ５６４ｍってどうやって作った。責任者読んで来い。

すると、突然。左手に人肌の温もりを感じた。

「ユー君。大丈夫ですよ。私が手を握ってあげますから。」

「せ、星香。」

あんた、男前やぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　俺よりも男前じゃん。こんなに良い子、なかなか世の中に居らんよ。

手足の震えが止まっていた。

「ね。」

マジで良い子やぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！　世界の中心で叫びたい。

突然。ガシャンっという音を立ててコースターが止まった。はて、なんで止まったんだ。まだ、１００ｍ位しか登っていないのにな。

乗っている人たちがガヤガヤし始めた。

『うおぁ！！！』

と男達は野太い声を上げた。

『キャアア！！』

と女性たちは短い悲鳴を上げた。誰もいきなりのトップスピードに何も心構えも出来ていなかった。

トップスピードで駆け上がるコースター。
さあ、来るならきやがれってんだ。

眺めが、アホみたいに良いなあ。あ、死んだ曾おじいちゃん今からそっちに行くよ。

曾おじいちゃんがこっちへおいでって、手を振っているのが分かる。

『ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！』

地を砕き、天を裂くような悲鳴が響き渡った。其処からの記憶が全く無い。多分、俺の危険防衛能力が発揮して強制気絶させたんだろう。最後がどうなったか記憶が全く無い。

気づいたら、「ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ」の前にあるベンチに座っていた。俺の隣には星香が居た。
他のベンチにも、「ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ」で見かけた人たちがたくさん居た。多分全員が、同じ目にあっただろうな。もう、絶対にあれには乗らないぞ。

「星香。大丈夫か？」

「え、ええ。何とか大丈夫です。」

言葉はちゃんと出していて、しっかりしているな。

「よし、次に行くぞ。」

「行きましょう。次は落ち着いたのが良いです。」

「俺もだ。」

重たい腰を持ち上げて立ち上がった。そして、歩き出す。
俺は常に、星香の歩幅に合わして歩いている。これぞ、紳士の嗜みだ。

「次はあれが良いです。」

そういって、星香が指差したのは、定番中の定番。お化け屋敷だ。

「い、良いぞ。お、おばけなんて、こここの世に、いい、い居るわけ、ななないないないからね。」

「や、止めましょうか？」

「いや、だだ大丈夫だぁぁあ。」

「そうですか。では、」

また、右手に温もりを感じた。

「私が、手を繋いであげます。」

顔を赤くして、恥ずかながらも言ってくれた。そんな事されたら、

逝くしかねえじゃんか。

「良し、逝くぞ。」

「はい、字は違う気がしますが、逝きましょう。」

そうだね、星香の方も字が違うね。後ね、星香が俺の手を握った時に気が付いたんだけどね、星香の手も震えていたんだ。ここで漢をみせなけりゃあ漢じゃねえな。なあ、一馬（ユニコーン）よ。

作りはメッチャ雰囲気が出ている。建物は元からあった廃病院を使っているらしい。

正直に言おう、ちびってしまいそうです。俺、霊的なもの一切ダメなんです。

マジで、でそうな雰囲気があるんですが……ていうか、マジで出るんじゃないか？　特に深夜とか……ていえるほどのマジでヤバそうなお化け屋敷です。

「い、逝くぞ。星香。」

「は、はい。」

二人して、声が震えていた。さあ、逝ってきます。

「お二人ですね。では、どうぞ。」

係員にパスを見せて、暖簾を潜った。

もう、そこから先は思い出したくない。二人して、『ぎゃああああぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁああぁぁ！！！！！』てガンガンに叫びまくった。

怖すぎて、マジで脱糞しそうになりましたよ。割とガチで……そんな事は命に代えてもしないけどな。

何なのあれ、地を這うゾンビ。空から降ってくるゾンビ。外の窓から入ってくるゾンビ。地面から手を突きだすゾンビ。ゾンビ。ゾンビ。ゾンビ。ゾンビ。ゾンビだらけで、頭が可笑しくなりそうだった。

一番のインパクトは、ゾンビが壁をぶち破って、そこから全力ダッシュして追いかけられたときは、マジで俺ら二人も全力ダッシュで逃げた。

もう嫌だ。

もう、お化け屋敷なんて入らないぞ。よくギャルゲーの主人公とヒロインがお化け屋敷に入って、主人公は良い思いをするけどな。このお化け屋敷はそんなレベルじゃない。

下手すりゃあ、トラウマレベルだ。それほど完成度が高くて、滅茶苦茶怖いお化け屋敷だった。

「せ、星香。だ、だだいじょうぶか？」

「お化け怖い。お化け怖い。お化け怖い。」

ヤバイな、変な意味でトリップしてやがる。困ったぞ。

「こうなったら。」

パンっ！！　という手と手を打ち合わせた音が響いた。ようは星香の目の前で思いっきり両手を叩いたんだ。

「はっ！」

よし、正気に戻った。

「大丈夫か？」

「私は、一体？　思い出そうとすると、頭が痛むんですが？」

完全にトラウマになってるね。

「大丈夫だよ星香。何も無かったよ。そう、何も。」

「そ、そうですか。ユー君がそういうなら信じます。」

「それにしても、腹減ったな。」

時間を確認してみると、昼丁度の時間帯だった。

「そうですね。なら、あそこのベンチに座ってランチにしましょう。今日は頑張ってお弁当を作ってきました。」

そういって、バックを掲げる。

すぐ傍にあったベンチに腰をかける。星香は中から四段ぐらいになっている弁当箱を取り出して、箸と布巾を取り出した。

「あれ？」

「どうした、星香？」

「飲み物を忘れてしまったようです。」

「そうか……よし、俺が買って来よう。」

「お願いしますね。ユー君。私は麦茶でお願いします。」

「了解。」

俺はベンチから腰を上げて、早歩きで自動販売機を探しに行った。
さあ、急ぐぞ。こういう時に展開に限って、戻って来た時に星香が誰かに絡まれている可能性は９９％位ありそうなんだよな。
特に、星香がメッチャ可愛いのが一番の理由だろうな。

ベンチから１００ｍ位離れた所に自販機があった。思っていたより遠くにあったな。
５００円玉を入れて、麦茶と緑茶を買った。
そして、ダッシュ。

「放してください。」

「良いじゃんかよ。一緒に遊ぼうぜ。」

「遠慮します。連れが居ますので。」

「そんな奴と遊ぶより、俺らと遊んだ方が楽しいよ。」

やっぱり、当然の如く。ベタなガラの悪いチャラ悪に絡まれていた星香。
人数は二人。
俺は重い足取りで近づいていく。
「おい、何勝手に人の連れに手を出してんだ。」
チャラ男その１の肩に手を置く。
「ああん、何だてめえ、は……」
「デカ！！」
語尾が小さくなっていく。それもその筈、一応俺の身長は１４歳でありながら１８０ｃｍ超えているんだ。
それに比べて、チャラ男その１とその２の身長は１７０ｃｍあるか、無いかだ。
「おい、何人の連れに手を出してんだって聞いてんだよ！！　聞こえてねえのか？」
自分なりに結構ドスの効いた声で言ってみた。
するとどうだ、チャラ男その１とその２は『ひぃぃぃぃぃぃ！！』て言いながら逃げて行った。
良かった殴り合いにならなくて。俺喧嘩なんてやったことないし、痛いの嫌いだから。
その証拠に、俺の脚が微妙に震えていたんだ。この事は内密にお願いしますね。

「星香、何もされてないか？」

「はい、大丈夫です。ユー君が助けてくれたおかげです。」

頬を緩ませている星香。なぜ？

「星香が無事なら良かった。それにほら、コレ。」

星香に麦茶を渡す。

「ユー君。ありがとうございます。」

「じゃあ、食べようぜ。星香のお弁当。」

「はい。」

『いただきます。』

ジューシーな唐揚げに、トロっとした卵焼き。サクサク衣のエビフライに色々な具があったオムスビ。ポテトサラダと色々な食べ物があった。

どれも、文句なしにすごく美味しかった。

最高に美味いよ星香。

食べ終わり、遊園地も後半戦に移る。

第八話　一馬（ユニコーン）の休日その４　（後書き）

次回、遊園地編後半です。

第九話　一馬（ユニコーン）の休日その５　（前書き）

更新です。

今回は何時もよりカッコイイ一馬（ユニコーン）です。

第九話　一馬（ユニコーン）の休日その５

星香の手作り弁当も食べ終わって、今はベンチで食後の休憩。
食後に行き成り動くと、横腹痛めるので、皆さん気を付けましょうね。特に走ったりしたら地獄を見ますよ。

買ってきたお茶を飲みながらのんびりと俺は空を見上げていた。
雲って良いな。自由で……俺もあんな自由になりたいな。好きな様に姿を変え、好きなように流れる。羨ましいな。

何か爺臭い思考だな。そうだよな、実際転生前と転生後の精神年齢を足すと３２才だからな、よくよく考えると先進年齢三十路を超えた只のオッサンだな俺。

自分の事は「俺」ってよんでるけど、オッサンだし「わし」って言おうかな……止めよ。さらに老けそうだ。

隣を見ると、星香がコクッコクッと頭を上下に動かしていた。もしかして、眠たいのか？　まあ、分らんでもないな。
満腹でしかも、丁度良い暖かい気温だからな。眠くなるのも分らんでもないな。

実際に俺も少しだけ、眠くなってきているしな。

すると、トンッという感じに左肩に少しだけ重みを感じた。
そちらの方に視線を移すてみると、星香が俺の左肩に頭を置いてグッスリ寝ていた。星香のシャンプーの甘く良い香りが鼻孔を擽る。
俺は無意識の内に星香の髪に手を伸ばしていた。
そして、星香の髪を撫でそうになった所で、
「俺は何をしているんだ。」
スグに手を引っ込めた。このままじゃ少し寒いだろうと思い、俺は頑張って着ている上着を星香が起きないように頭が落ちないように脱いだ。
難易度１０がｍａｘだとしたらこれは難易度８位あるぞ。そんなどうでもいい事は良いや……
俺は星香に俺の上着を前から羽織らせた。するとどうだ、星香の右手が俺の裾を掴み、左手で俺の上着を掴んだ。
一瞬起きているんじゃないかって疑ったが、どうでもいいやっていう感じで流した。
お茶をチョビチョビ飲みながら、行き交う人達を見つつも空を見上げて雲を観察する。こういうのんびりいしる日も良いな。
さてと、この後に今までの良いことがひっくり帰るような不運が俺に襲いませんように、最後まで何もありませんように、一応神頼みをしておく。今日で何回やったか分らない神頼みだ。
やっぱり日本って平和だな～中東部の国の方では内線やら隣人国と

の戦争、また他の所では麻薬の密売人だけが居るような街もあるって聞いたし、マフィアが数多くいるっていう国もあるって聞いた。

そう思うと、日本って平和だな。

何か性分でも無いことを考えてしまっていたな。

また俺は行き交う人達（カップルと家族連れが多し）と空を見上げて雲を見ながらボーっとしていた。本当に良いな。こういうのんびりした事が出来る日っていうのはね。

それから大分時間が経ち、空の色に赤みが出始めた所だ。星香は未だに寝ていて起きる気配は無い。

起こすのが申し訳ないがそろそろ起きないと、時間が無くなるよ。

「星香。そろそろ起きろ。」

「う～ん。後一万年。」

「マジで居たよ。寝つつもこんな事を言うやつが現実に居た。」

その事にお兄さんはビックリ仰天だよ。そんな事はいいとして、

「はよ起きろ星香。」

「んですかユーくん……わたしのねむりをさまたげるとはいいどきょうですね。」

「そんな事を言ってる場合なのかな。」

「はえ？」

目をパチクリさせ、頭を起こして辺りを見回す。その際に掴んでいた俺の服の裾と羽織らせていた上着を話した。上着がパサッと落ちた。そしてテンテンテンっというのが、今星香の頭の中を支配しているだろうな。

「あの～ユー君。」

「うん、どうしたんだいへへいへいへい。」

「今、忌野清志郎さんはいいです。」

「はい。」

そんな凄みを効かせた声を聞いたら、従うのは当り前です。

「今、何時ですか？」

「もう、午後の5時過ぎだよ。」

俺の言葉を聞いた星香は頭を押さえた。

「何て事でしょうか。私は大変な失態をおかしてしまいました。」

星香がとつぜんガバッと立ち上がって、俺の前まで来た。え？　何？　起こしてくれなかった俺に対しての鉄拳制裁パンチを食らわす気ですか。そうですか？　なら来なさい。俺はいくらでも受け止めてやるぞ。

さあ、来い！！！！！

覚悟を決めた。しかし、痛みは一切襲ってこない？　なぜ？

「ごめんなさい。」

「え？！」

星香が頭を下げた。なぜ？

「私のせいで、わ、わたしの、っせ、せい、で」

呂律が回らないのか、きちんと喋れていない。

「本当にごめんなさい」

そう言って、どこかに駆けだしていった。

星香が泣いていた。その事に俺は頭が真っ白になった……星香が泣いていただと？　直ぐには信じられなかったが頭が覚醒してきた。

「ああもう、世話をかけさせる！！」

俺も立ち上がり、星香がバックを置いたまま走り去ったのでそれを片手に持った。そこで、俺らの一部始終を見ていた二十代前半のカップルが俺の傍までやって来た。

「頑張りなさい。」

「女を泣かせたんだ。その責任はキッチリとってやれよ。」

そうやって、心配して声をかけてくれる人が居たんだな。

「ああ、分っている。」

俺は走り出す。全力で走る。

人に当たっては「すいません」と謝りながら、人が行き交う遊園地の中を走る。多分、そこまで遠くに行ってはいないはずだ。

もう、なんで星香が謝るんだよ。そんな必要は無いだろうが！！謝るとしたら俺の方だろう。

星香が楽しみにしていた遊園地。

そんな大切な事も忘れて俺は、肩にある星香の温もりが暖かいことを良いことに、星香を起こさなかったんだ。

そんな俺が星香を泣かせたんだ！！　つくづく思うよ。俺は最低の男だってな！！！！！　多分、あのクソナルシストより最低な男だ。

俺は！！！！！　そんな自分が嫌になる。

そうやって、後悔するのは後だ！！　今は星香だ。

「星香！！　星香！！　どこいるんだ！！」

反応してくれるわけないか。クッソ！！

走り続ける。俺は止まる気は一切ない。星香が見つかるまで、絶対に俺は足を止めない。

辺りを見回すと一か所だけ目に止まった。

そこは……「ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ」もう、俺が一生乗らないと誓ったジェットコースターそこの最後尾に星香が居た。

一瞬だけ目を疑ったが、直ぐに星香の所までダッシュした。幸い星香にはバレルことなく、隣まで来た。

すると、俯いていた顔を上げて俺の方を見た。

もう、涙を流していなかったが、目が赤く腫れていた。

俺のせいでか。マジで最低の男だな。

でもなそんな最低の男でも、俺は最低の中の最高の男になろう。星香を泣かせた、勿論俺のせいだ。

だけどな、星香が楽しみにしていた遊園地を悲しみで終わらせる気は全く無い。最後は楽しかったって言わせてやる。そうすりゃあ最低の中でも最高の男だろう。

俺は星香の頭に手を置いて、繊細なものを取り扱うように優しく撫でた。

「ユーくん。」

何度も何度も撫でた。

「星香が謝る事なんて一つも無いんだよ。」

「で、でも！！」

「でもも案山子もあるか。謝らないといけないのは俺の方なんだよ。」

「ユー君。」

「俺はな、星香が楽しみにしていた事を完全に忘れて、自分に甘えて、そして星香に甘えて起こすことをしなかったんだよ。その結果が星香を悲しませたんだ。だから、スマン星香。」

「……っぷ。」

「へ？！」

星香が吹いた？　どういうこった？　手を口元にあてて笑っているだと。

「本当にユー君は……私は只もう一度『ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ』に乗りたかっただけですよ。」

「え、えええぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

人目を気にせずに大声で叫んでしまった。ああ、人目を集めてしまった！！　恥ずかしい。

だが、そんな事は嘘だとすぐにわかった。だって、星香の頬に涙の跡がクッキリと残っていたからだ。

「そうか。なら、一緒に乗ろうか？」

「え？！　良いんですか？」

何でビックリするのさ。

「一人で乗るなんて水臭いぞ。二人一緒に来てるんだ、なら一緒に乗って共感しようや。」

「はい。ユー君。」

やっと笑ってくれた。

さあ、もう一回地獄を味わってきますか。まさか、もう二度と乗るかって誓ったその日にもう一度乗るなんて……ついてねえな俺って奴は。

「ユー君。何で笑みを浮かべているんですか？」

「お？！　笑みを浮かべていたか？」

「はい。何か嬉しいっていう感じの笑みを浮かべていましたよ。」

そうか、偶には運が無くても良い事があるって分ったからな。

「さあ、星香覚悟を決めておけよ。」

「もう、並んだ瞬間から覚悟を決めています。」

「「いざ、出陣！！！！！」」

『ぎゃああああああああぁぁぁぁぁぁああぁぁぁあああ！！！！！！』一生分の叫び声を二人一緒にあげた。こういうのも良いよな。

また、先ほどと同じ状況にあった。気が付けばベンチに座っていた。マジで三途の川の半分以上も進んでいたよ。危ない危ない、もう少しで完全にあの世に行ってたよ。まったく、川の向こう側でなのは(19才version)が全裸でこっちにおいでって手招きするから、つい誘われちまったじゃねえか。流石なのは、フェイト程のスタイルじゃ無いけど、バランスが良いエロい体してやがった。

まてよ、星香も元々はなのはから作られたようなもんだから……グボハ！！！！！　エロい。星香の体もエロくなってしまう。goodjobだ！！！

「いた！」

気絶から目を覚ました星香が、俺の足を踏みつけていた。

「あの～星香さん。何で私目の足を踏んでいるのでしょうか？」

「何となくです。」

「さいですか。」

とは言っても、星香はすぐに足をどけてくれた。

「ユー君。」

「うん？」

「今日はありがとうございました。」

星香が満面の笑みで俺に笑いかけた。

「あ、ああ。」

俺の顔は茹でタコのように顔を真っ赤にしているだろう。ダメ俺、星香の笑顔に弱いわ。

これあから星香は可愛いんだよ。

この時たま見せる感情を表に出した最高の笑顔が……この笑みが見れて良かった。今日の疲れが吹っ飛んだわ。

「ユー君。帰りましょう。」

立ち上がった星香が、座っている俺の手を引っ張る。

「良いのか？　まだ閉まるには時間が余っているぞ。」

「良いんです。」

「そうか、星香がいうなら良いけど。」

「ですけど、」

「うん？」

星香が急に顔を近づける。

「もう一度連れて来てくださいね。その時はうんっと一杯楽しみましょう。今日以上に。」

「ああ、そうだな。星香。」

こうして、俺の休日は過ぎて行った。この日の帰りに折角隣町まで来たから、飲食店によって夕食をすまして家に帰った。

夕食を外食で済ました一番の理由は、家に帰って作るのが面倒臭いからだ。

第九話　一馬（ユニコーン）の休日その５　（後書き）

よく頑張った一馬（ユニコーン）

第十話　一馬（ユニコーン）とはやて　（前書き）

更新です

第十話　一馬（ユニコーン）とはやて

週初めの学校ほど面倒臭い事はこの世に無い。

昨日は大変だった。完全に宿題をやるのを忘れていたせいで、気づいたのが寝床に着いた時だ。
宿題なんてやりたくないんだが、一応やっておこうっていう感じでやり進めた。

宿題は国語・数学・英語の三教科が出ていた。

中学レベルの数学なんて簡単すぎて途中式は一切無く。答えだけを書いている。
答えのプリントを貰っているが、見る必要性が感じられない。簡単すぎる。

他の教科も同じだ。それでも、量がオカシイほど有った為に終わるのに3時間以上もかかってしまった。俺の睡眠時間が減っていく。
そして、学校では居眠りもサボりも出来ない。

俺の命減ってゆくだけ。

ああ、学校めんどい。だが、行かなければならない。

親が金を払って行かしてもらっているんだ。行かなければ親不孝というものだ。
まあ、あの親だから行かなくても親不孝なんて思わないだろうが俺が気にするんじゃい。

教室に入ると……あれ？　変態（はやて）とバーニングとすずか（バーニングの嫁）しかいない。
という事は、寝・れ・る！！！！！　居眠りできる。特にあのクソナルシストが居ない。

よっしゃあぁぁぁぁああ！！！！　吼えたで、俺の魂燃えたぎるうううう。

早速カバンを枕代わりにして、お休みなさ～い。寝た。
クラスの奴はもう、慣れたのか誰も気にも留めていない。

ユッサユッサ。ユッサユッサっと誰かが俺を起こそうと揺らしている。
誰だ、俺の聖地を汚す輩は！！　重たい瞼を開けて、顔を上げるとはやてが居た。なぜはやてが俺を起こそうとする？　大抵はバーニングの筈だろう。

疑問に思っていると、はやてが俺の耳元に口を近づけた。何か興奮する。

「最新情報が入ったで。」

「なんだと。それは真か？」

はやてよくやった。流石はやてだ。

「そうやで、うちの情報に狂いはないで。」

「そうか、それは誰のなんだ？」

「なのはちゃんと、アリサちゃんと、すずかちゃんや。」

「うぉぉぉおマジか！！」

興奮して声がついつい大きくなってしまった。

一斉に視線がこちらに集まる。

「静かにしいや。一君。」

「かずくん」俺ははやてにそう呼ばれている。なのはもすずかも俺の事は「かず君」と呼んでいる。

その呼び方をするのは、去年俺と関わりがあったメンツだけだ。

アイツだけは「一馬（ユニコーン）」て呼ぶけどな。

「おっと、スマンスマン。」

お口チャックする。

「はやて。その情報は何時の時の情報だ。」

「ふふん。コレはな先週の金曜日にうちが直々に確かめたんや。」
「流石はやてだ。」
「褒めても、何もでぇへんで。」
「知っている。」
二人して、笑みを浮かべる。誰も近寄ろうとはしない。
だろうな、コソコソと話していて、イキナリ笑みを浮かべる奴なんかと関わりたくないよな。

「ほいで、誰のが知りたい？」
「なのはだ。」
即答する俺。
「ホホウ、ええ趣味や。」
「だろ。」
「なら、何をくれるんや？」
情報を与えてくれる代わりに、こちらははやてに何かを差し出さなければならない。
何の情報かって？　そりゃあはやてと言えば一つしかないっしょ――――――――おっぱいだ！！！！！

「これで、どうだ？」

そういって、俺がはやてに渡したのは……写真。とある写真。

「ナイスや、一君。」

「だろ。」

ドヤ顔をする。マジで俺もいい仕事しただろう？　はやて。

「これなら、うちの情報（おっぱい）を渡しても申し分ない。」

その写真に写っていたのは、なのはの姿が映った写真だった。しかし、只の写真ではない。

なのはが、珍しく学校で居眠りをしてしまっている写真だ。しかも、デへへへへって満面の笑みで涎を垂らしているんだ。

最高の一枚だろうはやて。これは俺以外には誰にも見せていない、秘蔵写真だ。

「なら、早く教えてくれよ。」

「良いで、先ずはさわり心地な。」

「ゴクリ。」

つい、効果音を言ってしまった。

「良い感じに弾力があってな、それでいてマシュマロみたいにスベスベしとるんや。」

「うぉぉぉおおお！！」

やべぇ興奮するぞこれは。

「揉み応え抜群や。」

流石はやて閣下だ。最強の聖書（おっぱい）だ。

「サイズのほうはな。」

「うんうん。」

「大きくなっとったで、多分Cカップはかたいで、まだまだ成長のよちありや。」

「はやて様様だな。」

はやてを奉りそうろう。したい気分だ。

「ついでに、もっと良い情報を教えたるで。」

「おお、教えてくれ。」

「誰にも言わんて約束してな。」

「ああ、約束する。」

ほな、こっちに移動するで。俺は立ち上がって、はやてと一緒に廊下に出て端の方まで行った。
生徒の数が少ない。

「なのはちゃんのおっぱいな。」

「うんうん。」

「メッチャ敏感になっとたで。」

「な・ん・だ・と！！」

自然と声が大きくなってた。

「マジやで、揉んだ瞬間に甘く良い声を上げたんや。しかも一揉みする度に良い声を上げるんや。うちも興奮してもうたっていうより、興奮せん方が無理やで。」

「ヤバイなそれは。」

想像してしまった為か俺の息子が「呼んだ？」って返事をしてきやがった。「呼んでねえよ」ていったら元に戻った。良かった。

「多分な、おっぱいはなのはちゃんの性感帯やと思うで。」

俺とはやては厚く握手を交わした。

「「ｇｏｏｄ　ｊｏｂ．」」

こうして休憩時間は過ぎて行った。

流石おっぱい神。はやて様だな。一生ついていきます。

第十話　一馬（ユニコーン）とはやて　（後書き）

さすがおっぱい聖書はやてです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3482z/

魔法少女リリカルなのは〜運に見放された転生者〜

2011年12月20日00時51分発行